

座ざ間まの大おお凧だこ



登場人物

ナレーター

なれーたー

代官だいかん

家来けらい

名主なぬし

村人むらびと

若者わかもの 1

若者わかもの 2

若者わかもの 3

若者わかもの たち

子供こども たち

女おんな たち



1



2



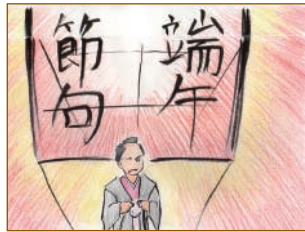
3



4



5



6



7



8



9



ナレーター

むかし、武士の家では五月五日の端午の節句に、男の子の誕生を祝い、凧をあげる慣わしがありました。

元気な子どもに育つようにねがって凧をあげるこの慣わしは、しだいに庶民のあいだにも広まり、江戸時代にはかわいい孫に凧をおくる「祝い凧」となりました。

座間の大凧も、もとはこの祝い凧にあるといわれています。

はじめのころはそれぞれの家で凧をあげていましたが、祝い凧は高くあがるほど縁起がよいとされ、それには大きい凧の方が凧をいっばい受けて、高くあがるのでした。

村の中でもお大尽（金持ち）や有力者の家では、競って大凧を作るようになり、村の若い衆が手伝いによばれ、あちらでもこちらでもごちそうになり、そのはりきりようといったらたいへんなものになりました。今とちがって遊びの少ない若い衆が凧つくりにも夢中になったのもむりはありません。大凧は空に高々とあがり、やがて村のまわりになっていきました。

ところがそのころ…幕府からは庶民が派手なふるまいをしたり、



農民のうみんなどがおおぜいで集まったりすることを禁止きんしするおふれが出さ
れていました。

ナレーター

さて、ここは代官所だいかんしよ。

だいかん

「うーむこまったものだ」

けらい

「ことしもどうやら凧あげをおこなうようすで、各家かくいえでも大小とり
まぜた凧をあげ、子どもの節句を祝うということです」

だいかん

「うーむ、ますますもってまづい：幕府のめいれいでこの地をお
さめるだいかんとしてもこまったものだ：」

ナレーター

当時は農民あつが集まるだけでも御法ごほうにふれる世の中でした。

だいかん

「凧あげなど子どもだけで二・三枚まいあげればよいものを。それをつ、
村むらの若い衆しゅ・としよりまでがさわぎたてるほどのことか。もし一揆いっき
にでももりあがったらどうする！」

ナレーター

まつりですえひかえめにさせ、ところによつてはやめさせるこ
時世じせいでした。村中むらじゅうで大さわぎをするなどんでもないことでした。



さつそく、村々に大風あげを禁止するお触書ふれがきが出されました。

ある夜よのことでした。

村人 「名主なぬしさま、えれえことじゃ」

ナレーター 一人の村人が名主のところへかけこんできました。

村人 「あれほどきんじられている風作りを若い衆わけえしがひそかにやっとなるじゃ」

なぬし 「うむむむ ばかものめ、お上かみにはむこうでどうする」

ナレーター この村からお縄者なわものを出してなるものかつ、と年老としおいた名主はつえをつき、大急ぎで村人の後についていきました。むこうの小屋こやからはあかりがもれてみえます。がらつと戸をあけると

なぬし 「やはり…」

ナレーター 小屋の中ではおおぜいの若い衆わかしゅたちが風のほねぐみのための竹やなわを持ちこんで作業さぎようをしていました。

なぬし 「そげなものを用意よういして… おめえたち何を考えておるんじゃ」

若者わか1 「今年ことも風をあげたいんじゃ」

若者2

「こつちとら、なーにも悪いことしてねえ」

なぬし

「おかみはわしらを信用しんようしておらん、集まっておるとよからぬそうだんをしておると思うんじゃ。さあ帰れけえ」

若者3

「名主なぬし、わかったよ」

ナレーター

ある若者わかものがいました。

若者3

「群むれておるといけねえんであれば… みんな帰れけえ、おらだけ残のこつて竹わりをするっ」

ナレーター

ほかの者も一斉いっせいにさげびました。

若者1

「おらものこる」

若者2

「おらも」

若者たち

「おらもだっ」

なぬし

「ええからかんにしろ。みんなとつつかまるだぞ」

ナレーター

若い衆わかしゅは口々に自分たちの思いを名主にぶつけました。

若者3

「風は座間の子どもらのためにあげるんじゃっ」

若者1

「おいらたち若い衆わかえしがあげてやらんでだれがあげるっ」

若者2

「名主だのとしよりはおかみの目ばっけえ氣にして、風をあげるとど



ころじゃなかる」

若者3

「おいらたちのあとを継ぐ子らに凧をあげてやるんじやい！」

若者1

「端午たんごの節句せつくを祝ってやるんじやっ」

ナレーター

名主はかえすことばありません。

若者2

「それに： おいらたちは年ねんがら年中ねんじゅう働はたらきずくめで： この凧あげがいちばんの楽しみなんじや」

ナレーター

名主はだまって聞いていましたが、やがて腰こしをおとすと一本のわり竹を手にしました。ながめすかしつ、

なぬし

「なんじや、このわり竹は： ええか、わり竹はこうするんじや」

ナレーター

はものに竹をあてると パリッ パリリン 竹をさいてみせました。そのあざやかなこと。

なぬし

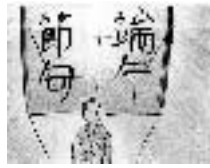
「このくれえにしてこそ凧があがるんじや。なにすっぽうだつてる、さつさとやらんかっ」

若者たち

「わああつ、やつぱりおいらたちの名主さまじや」

ナレーター

いつせいに若い衆わかしゅからおどろきの声とはくしゅがわきおこりました。



だいかん

ナレーター

それからしばらくたったある日のこと。

「なにっ 凧があがっておるとなっ バカな、あれほどきつくもう
しおいたのにつ」

だいかんはあわてました。そして馬にとびのるとかけ出しまし
た。

村人たち

ナレーター

そんなだいかんの目に入ってきたのは、今、大空にまいあがる
うとする『端午たんご 節句せつく』の文字がおどる大凧！ そして

「それっつ どおっ おっつ」

と大凧を引くかけ声と

村人たち

「わあっつ」

ナレーター

とあたりいちめん人々の歓声かんせいがひびいて聞こえてきます。思わ
ず馬を止めた、だいかんと供ともの者。

けらい

「うわっ す すごい！」

ナレーター

だいかんは



だいかん

「うむむ」

ナレーター

と、その光景をじつとながめていました。

それは今まで見たこともない、二間（約四メートル）四方はあるうかと思われる大きな凧でした。若い衆たちはかおをまっかにして力いっぱいつなを引き、子どもたちは両手をあげてばんざいをし、女やとしよりたちも

子どもたち

「わあ、あがった、あがった！」

女たち

「あはは、あはは」

ナレーター

とおおよろこびです。村の者みんなが一つになって大凧あげを祝っているのです。どのかおにもよろこびとしあわせがあふれています。

なぬし

「お代官さま」

ナレーター

だいかんのうしろで声がしました。年老いたこの村の名主です。

なぬし

「このたわけたさわぎは、みんなこの名主のさしがねです。わたくしめをひっ立ててください。あの者どもは年に一度、村の子らのためにたあいもなくさわぎおるだけです。これが終われば、また、野良



ナレーター
仕事しごとに漁りように、もくもくとはたりますのじゃ… 今日がせいいつ
ぱいのぜいたく日びですのじゃ… どうぞ、わたくしだけをおなわに」
どうぞ、と名主は両手りょうてをさし出すのでした。

大空に舞う大凧、みあげる人々のどよめき、だいかんせい…

だいかんは目をとじ、しばらくしてしずかに言いました。

「なにか 歓声かんせいといつかさわぎ声こゑが聞こえぬでもないが… また、
よろこぶかおが見えぬでもない。しかし、凧などどこにも見えぬ…」

ナレーター
そして、しかと目をあげ、顔かおをあげると

「いさましく雄雄おおしく大空にまう… なんとみごとな！ 凧など…
どこにもみあたらん。これっ名主」

なぬし
「へへえ」

だいかん
「なるべく しずかに… な」

ナレーター
だいかんは馬の首をかえして、なにごともなかったようにたち去さ
っていくのでした。



このように座間の大凧あげは、いくどとなく中斷ちゆうだんの憂うき目めにあいながらも、いつのまにか不死鳥ふしちようのようによみがえり、明治めいじのころへとつづいていったのでした。そしてますます大凧となつて座間の空に舞まうこととなつたのです。

この作品は、歴史的な事実取材したフィクションです。